

# 私の 転機

医者という仕事よりも、結婚を選んだという結論にはできない。医者は、私のアイデンティティーそのものなのだから。米国での結婚を機に、再び、医者を目指した松本さんに転機を伺いました。

私には心臓病を患った6歳上の兄がいました。どこの病院からも手術を断られるくらい深刻な状態だったので、彼が10歳の時、アメリカ留学から帰ってきた先生が手術を引き受けてくださり、奇跡的に助かりました。両親は、自分たちの経験を活かしたらと、「心臓病の子どもを守る会」に入り、活動もしていました。私も、心臓病の子どもたちとキャンプに出かけたりしたのですが、そこでは友達になつた子が亡くなったりするわけです。幼い頃から、病気で戦う人の世界と、健康な人の世界とのギャップに苛まれ、何

不自由なく生きることには違和感を感じていました。どこかに「この世界を忘れて無関心で生きていたくない」という気持ちがあつたんです。なので、自然と医学部を選択しました。漠然と小児科医になりたいとは思っていませんが、小児科は寝る間もないほど忙しいことで有名で、でも、大変だと言われると、頑張らなければって(笑)。最終的には、母が言った「どんなに疲れて寝ていても、ベルが鳴った時、子どもが苦しんでいると思ったら起きられるんじゃない」という言葉が、後押ししました。小児科医に

なつた今も、時折かすめるんですよね。あの時の兄はこんな感じで、母はこんな思いだったのかなって。それを思うと、自分がここで頑張れば、ひよつとしたら助かるかもしれない、その可能性があるならって、どんな時も踏ん張れるんです。

## 米国で奮闘する母の味方 子育てチームの一員に

腎臓小児科医として4年勤務した後、研究のために渡米。そこで、アメリカ人と結婚したのですが、思ってもみなかった問題に直面しました。日本の医師免許はこちらで通用しませんから、医者として働くことができなくなつたのです。私にとって、医者であることは、もはや日本人や女であるといったアイデンティティーそのものだったので、なので、夫に「こちらで医者になる努力をするから、全面協力して欲しい」と頼みました。とは言ったものの、そこからは想像を絶するしんどさでした。二度の出産を経ながら、試験を受け、研修医として働く。40歳を超えて挑戦することではないですね(笑)。

医者家族ではなく、患者家族の視点から、医者になることを決意。丁寧で分かりやすい病状説明を心がけている。



何度も諦めようと思いましたが、病人と健康な人との間で苛まれた、あの幼かった頃の自分が、今の自分を見て失望してほしくないという思いもあつて頑張りました。

アメリカで医者になる際、腎臓小児科ではなく、小児科を選んだのには理由がありました。私自身、こちらで出産を経験して、アメリカのプライマリーケアに感銘を受けたのです。日本では産婦人科が赤ちゃんを診ますが、アメリカでは、小児科医が主治医になります。生まれた時から家族と関わり合いながら、子どもの成長を一緒に見守る。子育てチームの一員になる素晴らしさを痛感したんです。

また、大病院ではなく、開業医の元で働くことを選択したのも、どこかに将来、開業することが念頭にあつたからです。というのも、私自身、来たばかりの頃は、英語が話せず、アメリカの医療システムも分からなくて苦労しました。そういった日本人の母親の不安を少しでも軽減できたらとの思いがあつたのです。去年、開業しましたが、日本語が通じるという安心感とはより、日本語を話せたおかげで松本先生に会えてよかったと思っただけだったらうれしいですね。今は、0歳から私の病院に来ていただいて、18歳まで健やかな成長を見届けることが、私の夢ですね。



小児科医  
松本 尚子 さん

まつもと・なおこ◎三重大学医学部、東京女子医科大学などで、腎臓小児科医として勤務した後、渡米。米国での結婚、出産の傍ら、医者になることを決意。幾度の困難を乗り越えて、小児科医になり、オークランド小児病院などで勤務。2017年11月、トーランスに小児科の総合クリニック「松本尚子小児科」を開業。発熱などの急な症状から、定期健診、予防接種まで取り扱う。